

論文要旨

狐仙信仰は中国北方地域で最も普遍的な民俗信仰の一典型として、中央政権に規制されていながらも、民間で千年以上伝承されている。本研究は、狐仙信仰を研究対象に、「千年伝承の理由」、「狐仙の特徴、性格と意味」、「漢民族民俗信仰体系における位置づけ」、「狐仙信仰の定義」の究明を研究の目的とし、これまで狐仙信仰調査空白の中国華中地方湖北省西北部 S 市地域を調査地に選定し、歴史民俗資料学の調査・研究法を利用して、「狐仙信仰の概要」、「文字資料にみる狐仙信仰」、「口頭伝承からみる狐仙信仰」、「祭祀儀礼からみる狐仙信仰」、「狐仙信仰と邪症治療との関係」、「狐仙信仰と他の民俗信仰との結合」という 6 つの視点から狐仙信仰の考察を行い、次のようなことが明らかになった。

(1) 狐仙の観念が成立する以前、狐はトーテム、自然獣、瑞兆、狐妖と狐神などさまざまなイメージで歴史文献に登場していた。唐代に狐が仙術を修める記述が見られるが、「狐仙」という言葉はまだ成立しておらず、道教の神仙思想と狐妖の変化観念が融合することにより、「仙狐」という言葉が成立した。明代に、道教が盛行しており、狐妖の観念と道教の修行思想が融合して初めて、「狐仙」の観念が成立した。明代の中後期に強まってきた狐仙の観念は清代に入ってから、狐神の観念を吸収し、民衆の間で広汎に受け入れられるようになり、その信仰も盛行していた。

(2) S 市の旧方志（明、清、民国）と新方志（新中国）には、狐仙の記述があまり見られないが、S 市地域の地方民俗学者の調査では、狐仙/狐精の口頭伝承、狐仙祭祀と巫覡の治病などが確認できている。狐仙が正式の歴史文献に記述されておらず、民間社会では長年に渡って伝承される理由は、その非正式性と秘密性にあると考える。

(3) S 市地域では、狐仙の口頭伝承は 7 類型あり、「古代書承の狐精故事」、「外部との交流」、「村人の生活体験、想像と実践」に起源し、狐仙信仰の一側面を反映する一方、村人の生活や行動に影響を与えている。

(4) S 市地域の狐仙祭祀は屋内祭祀、屋敷祭祀と野外祭祀の 3 類型がある。東北地方と華北地方の事例と比べて、狐仙祭祀の普遍性は両義性、擬人性、秘密性と非正式性があり、地域性は民間宗教者の多様化、統合概念の相違、道教的思想の影響にある。また、漢民族他界観の「神・鬼・祖先」3 位モデルと比べて、狐仙は山中他界からのよそ者に対応することも明らかになった。

(5) S 市地域の狐仙信仰は邪症治療と深く関係し、邪症の説明体系として巫医によって維持・運用され、邪症治療という実践を通じて治療者/巫医と病者/村人の双方によって伝承されている。

(6) S 市地域では、狐仙は他の神霊一胡子爺と結合する現象が見られる。両者が結合する過程と理由を考察することにより、狐仙信仰の眷属性、境界性（リミナリティ）という特徴が明らかになった。

結論として、狐仙信仰はその「千年伝承の理由」が柔軟性と境界性にあると考える。狐仙信仰は当時の社会状況に応じて、秘密祭祀あるいは公開祭祀を選び、柔軟的に中央政権に対応することができる。狐仙は正式の神霊ではなく、その神霊の化身あるいはお使いと見なされており、一時廃れても、他の神霊と結合することによって、より多くの信者を集め、その信仰圏を広げることができる。したがって、狐仙信仰は中央政権に規制されていながら、民間で千年以上伝承されている。狐仙信仰こそ、中国の民間における最も生命力が強い民俗信仰ではないかと結論づけられる。

狐仙は現世利益性、両義性、擬人性、秘密性と非正式性、地方民間宗教者の介入、移民

との関係及び道教的思想の影響という特徴を持っている。そして、治病神、致富神、除災神、守護神、子授けの神など多様な性格を持っているが、治病神と致富神としての性格が最も強い。また、狐仙は「神・鬼・祖先」と異なり、山中他界から人間界に來訪するよそ者を意味すると考える。

狐仙は、道教的精怪観念・神仙思想やシャーマニズム的要素を吸収し、各地域の民間宗教職能者に利用され、柔軟性と境界性を持つ民俗信仰の一典型であり、民俗信仰の研究史において非常に重要な位置を占めていると考えられる。

筆者は李慰祖（1941 [2011]）、周星（2011）の定義を踏まえて、「狐仙信仰は中国の華北地方に起源し、歴史上の狐信仰を継承し、道教的精怪観念・神仙思想やシャーマニズム的要素と融合し、民衆の日常生活の実践に基づいて創られ、口頭伝承、祭祀儀礼と祠廟空間を通じて民衆の記憶と知識となり、伝承されている。時には、移民の移動に伴い、華北地方から他の地方へ伝播、定着する過程で、その地方の伝統的な民俗信仰と出会い、次第に変容してくる。狐仙信仰は民衆にとって日常生活に不可欠な融合的な民俗信仰の1つである」と定義したい。

今後の課題として、巫覡と狐仙信仰の関係、富の移動と狐仙信仰の関係、日本の稲荷信仰との比較などが残される。